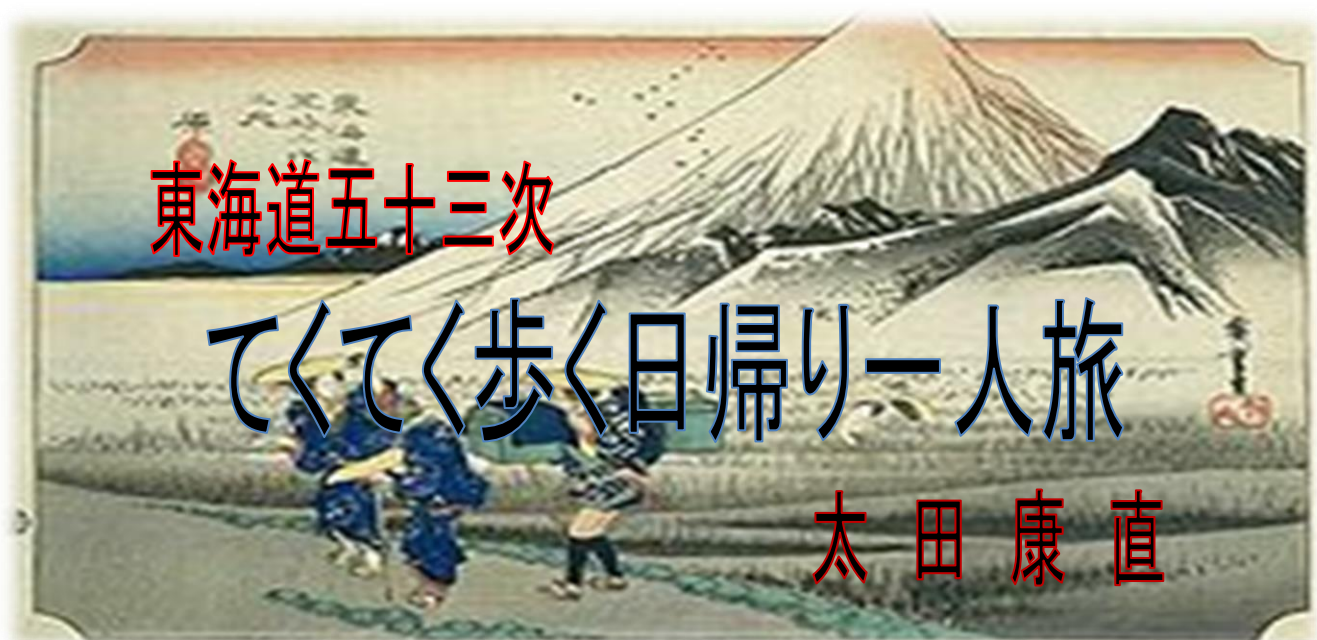




東海道五十三次—知られざる穴場—その⑩

この先はいよいよ松並木。戦争末期の昭和 19 年にすでに、国指定の天然記念物になったお陰で、他所の松並木のように松根油を採るための伐採を免れて今日に至っている。『東海道中膝栗毛』では、一足先に御油宿を出立した喜多さんが、この見事な松並木を一人で抜けるのが怖くなって、松の根方で待っていると追いついた弥次さんに、化けた狐と間違えられ後ろ手に縛られたまま、赤坂宿まで連れて行かれる舞台となった松並木である。



(歌川広重 赤坂宿)

松並木を抜けると、そこはもう赤坂宿（36 番目）。御油宿、赤坂宿間の距離は 1.7 キロ、東海道の中で最も短い。従ってお互いの宿場の飯盛女たちの、客をめぐる争奪戦もすさまじかったようだ。「御油や赤坂吉田がなくなんのよしみで江戸通い」と謡われた反面、「赤坂狐」と呼んで用心もされていたようだ。芭蕉はこの宿で、「夏の月御油よりいでて赤坂や」と詠む。御油宿の方から出た夏の月が、時を置かずに赤坂宿を照らすさまは、この 2 つの宿が近くて、両宿の間の松並木がとても美しいことを改めて思い出させてくれる。街道沿いの関川神社に立派な句碑が建っていた。

この赤坂宿で最も有名なのが今でも営業を続けている旅籠大橋屋。旧名を伊右衛門鯉屋と言い、現在の建物は正徳 6 年（1716）に建てられたもので、明治 4 年までは飯盛女も置いての営業であった由。もう一軒は「尾崎屋」という現職の民芸品店。「曲物 民芸品 製造卸問屋」と、屋根

付きの看板を掲げている。曲げわっぱの名で知られる木製の弁当箱ほか木の工芸品が店頭に並び。隣の交差点の名が紅里。飯盛女の多かった地の名残りか。

赤坂宿を出て1号線と合流した後、岡崎市本宿町に入る。「自然と歴史を育むまち本宿」の碑を見て進むと歩道を跨いで冠木門が建っていた。それを潜って進むと、「左東海道 右国道1号」の道標と本宿町の説明板。それによると宝蔵寺の門前町として栄えた町とのこと。宝蔵寺には家康の先祖である松平一族のお墓や、江戸板橋で処刑され京都三条大橋に晒されていた、新撰組隊長近藤勇の首塚があった。晒し首を盗み出した同志が、生前勇の帰依していたこの寺の住職に頼んで埋葬。逆賊ということで長年無縁仏扱いになっていたが、昭和32年総本山誓願寺の記録で事実が判明し、今では立派な胸像も建っていた。他に本宿陣屋と代官屋敷跡、一里塚跡があり再び1号線と合流して進むと、左斜め前方に入る道に道標があり、



(歌川広重 藤川宿)

ほどなく藤川宿(37番目)の東棒鼻に行き着いた。

「從是西 藤川宿」の標柱の長さや説明板等は、広重の「藤川・棒鼻ノ図」を元に復元されたとのこと。棒鼻とは宿の入口のことで、ここは東

棒鼻。小規模の曲尺手を経て進むと、左側に明星院、称名寺、旧米屋、旧銭屋があり、右側に高札場跡、問屋場跡、本陣跡と続き、脇本陣跡が現藤川宿資料館。やがて藤川小学校前に西棒鼻があり、宿場は終る。

西棒鼻の斜め向かい側の十王堂内に、「ここも三河むらさき麦のかきつばた」の巨大な芭蕉句碑。句中のむらさき麦とは、穂先までが紫色の美しい麦で、絶滅していたのを平成6年、県農業総合試験場の協力で再生に成功。5月中旬から下旬にかけてここ藤川の海道沿いに美しく実った姿を見せてくれるとのこと。好事家は季節に合わせて訪れるといい。

藤川宿を出て進むと松並木が始まり、名鉄の踏切を渡ってもしばらく続く。踏切の手前に「左吉良道」の道標。松並木の途絶えた先で1号線と合流。岡崎インターの下を潜る辺りの、1号線の右側の側道を歩いていたが、岡崎インター西の交差点を越えて少し行った所に、右斜め前方へ上がって行く細い道。大方お寺の参道で行き止るであろうと、半ば高を括りつつ歩いたが、行き止まらずに続いており、上りつめた辺りに冠木門。門の下に「岡崎二十七曲り」の説明板。先ほどのインター付近のただっ広い1号線の、左の側道を歩いたら絶対に見つけられず、岡崎宿(38番目)に入れずに通り過ぎたであろう。

さあいよいよ難所の岡崎二十七曲りが始まる。冠木門の所で右折、若宮町2丁目の信号の所に岡崎城東入口の碑があり左折、信号3つを直進して角に「両町より伝馬町角」の標識のある所を右折。「岡崎宿東海道二十七曲り」の説明図碑、「岡崎宿二十七曲 西本陣角」の道標、「西 京いせ道」の道標、「岡崎城下をしのぶ籠田総門跡」の碑、「岡崎城下二十七曲 岡崎城対面所前

角」、「岡崎城下二十七曲 材木町口木戸前」、「材木町より下角町角」等の碑が要所要所において左折右折を繰り返して、乙川堤防に出ると二十七曲りはおしまい。



(歌川広重 岡崎宿)

お分かりいただけたと思うが、上掲の拙文の途中で右折左折の説明をこれ以上繰り返すことが面倒になり、放棄させていただいた。やがて道は名鉄岡崎公園駅の前に出る。そこに「岡崎城下をしのぶ松葉総門跡」の案内板。ここで宿場はおしまいが、見所はまだ続く。「岡崎の地場産業八丁味噌」の説明板が八帖通り（東海道）と八丁蔵通りの分岐点にあった。辺りに「カクリユウ」と「まるや」の2軒の老舗があり、蔵が立ち並ぶ。道筋に「八丁味噌資料館」（元カクリユウ本社）も。NHK TVの『純情きらら』の放映前のこととて、人通りもなく落ち着いた界隈であった。ちなみに八丁とは岡崎城からの距離。

道はやがて矢作川に架かる矢作橋。江戸時代には東海道で最長の本木橋。渡り終えた右側に、日吉丸（秀吉の幼名）と蜂須賀小六の出会いにちなんだ、「出合之像」が建っている。

矢作橋からしばらく旧道を歩くと1号線と合流。そのまま2キロほど歩くと安城の松並木。熊野神社前に尾崎一里塚跡の碑を見て進むと「宇頭

茶屋」という、いかにも立場の跡らしい地名の交差点。その先の妙教寺前に助さん格さんと名づけられた2本の松。やがて来迎寺町の交差点に「従是四丁半北 八橋業平作観音有」の道標。在原業平ゆかりの無量

寿寺への道標。何回も訪れたことがあるので右折せず直進すると来迎寺一里塚の碑があり、知立の松並木が現れる。松並木が終る手前に「馬市之跡碑」と広重の絵を収めた図版、後方には馬の銅像が建っていた。広重のここでの図は、「池鯉鮒／知立・首夏馬市」と題して道の両側に繋ぎ止められた数多くの馬を描く。ここでの東海道は両側に側道がついているのが特徴だが、毎年4月25日からの10日間の馬市には、4500頭の馬が集まる海道一の市のため。ただし少し前にあった一茶の、「はつ雪やちりふの市の^{ぜにかます}銭吠」の市も、芭蕉の「不断たつ池鯉鮒の宿の木綿市」の市も木綿の市であり、商業の宿としても賑わっていたのであろう。それにしても知立宿(39番目)は、当時から「池鯉鮒」と「知立」（現在名）の表記が混在していた珍しい例。



(歌川広重 池鯉鮒)

この後の宿内にも、知立問屋場跡、池鯉鮒宿本陣跡、知立城跡、知立神社、総持寺等、「知立」と「池鯉鮒」の表記の混在が見られる。